

GROWTH

2024 Autumn
vol.45



せんだい3.11メモリアル交流館での座談会の様子



東北学院大学

〔大学院〕文学研究科・経済学研究科・経営学研究科・法学研究科・工学研究科・人間情報学研究科
〔学部〕文学部・経済学部・経営学部・法学部・工学部・教養学部・地域総合学部・情報学部・人間科学部・国際学部

土樋キャンパス

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1丁目3-1
TEL 022-264-6411(総務課)
FAX 022-264-3030(☎)

五橋キャンパス

〒984-8588 仙台市若林区清水小路3-1
TEL 022-354-8100(総務課)
FAX 022-354-8105(☎)

泉キャンパス

〒981-3193 仙台市泉区天神沢2丁目1-1

東北学院大学後援会通信 GROWTH(グロース) vol.45

発行日／2024年11月
編集／東北学院大学後援会事務局(総務部総務課内)
発行／東北学院大学後援会
〒980-8511 仙台市青葉区土樋1丁目3-1 TEL 022-264-6411 FAX 022-264-3030
E-mail kouenkai@mail.tohoku-gakuin.ac.jp URL <https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/kouenkai/>
制作／株式会社 創童舎

【本紙における個人情報及び掲載記事の取り扱いについて】

★ 本紙に掲載されている個人情報は、本人の了解のもとで本紙に限り公開しているものです。よって、第三者がそれらの個人情報を別の目的で利用することや、本紙の無断転載はお断りしております。
★ 本紙に関するご意見・ご要望をお待ちしております。

東北学院大学 後援会通信“グロース”

GROWTH

2024 Autumn
vol.45

特集

能登半島地震

被災地ボランティア

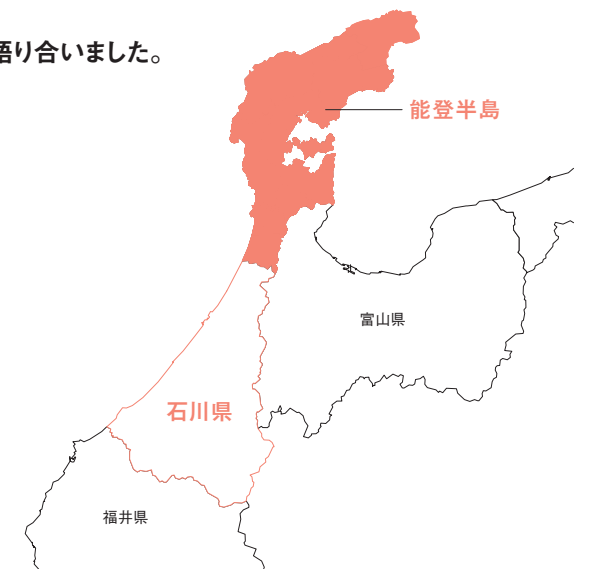
学生座談会





能登と3.11。 見たもの、感じたこと。

本学の総合ボランティアステーションでは、
8月18日～23日の6日間、
今年1月1日に発生した能登半島大地震のボランティアとして
6名の学生が石川県輪島市で復旧・復興に向けた活動にあたりました。
今回は参加した学生たちが、仙台市若林区の荒井地区にある
「せんだい3.11メモリアル交流館」で座談会を実施。
現地で感じたことや、それぞれの震災の記憶について語り合いました。



特集

能登半島地震
被災地ボランティア
学生座談会

VOLUNTEERING in NOTO



経済学部 経済学科 4年
山本 咲良さん



教養学部 地域構想学科 4年
鈴木 凌さん



経営学部 経営学科 4年
白田 優さん

総合ボランティアステーションとは？

東日本大震災の発災後、学生たちから被災地の復旧・復興活動に携わりたいという声が多く上げられ、「災害ボランティアステーション」を結成。宮城県内外の被災地でボランティア活動を展開してきました。次第にその活動内容は災害ボランティアだけではなく、地域の課題対応など多岐に広がりを見せるように。また、参加する学生も多様化し、幅広いボランティアに対応する組織として、2023年10月に「総合ボランティアステーション」(以下、ボラステ)へと組織変更しました。

今回の能登での災害ボランティア活動にあたっては、地震発生直後から「能登でボランティア活動をしたい」という要望が寄せられました。本学では「災害ボランティアチーム」を立ち上げ、準備や安全面などを踏まえて8月に活動することを決定。事前にボラステのスタッフ、災害研究を専門にしている定池先生による事前授業などを行った上で6名の学生が現地へ。金沢市の北陸学院大学と連携して、小学校の清掃や住宅の瓦礫の撤去、仮設住宅の見回りなどを行いました。

地震発生直後から募金活動などを開始。

—— 本日はよろしくお願いします。まず初めに、みなさんがボランティア活動を志した理由やボラステに加入した理由を教えてください。

白田 子どもの頃から簡単なボランティアのようなことをしていました。「ありがとう」と笑顔で言われると、人の役に立てていることを実感でき、こちらも勇気づけられるのでボランティア活動を続けています。

山本 私はボランティア活動を通じて、知り合いのいない仙台で友人を作りたいと思ったのと、学生だけではなく地域の人とも関わりたいかったのが大きな理由です。

鈴木 ボランティアを始めたきっかけは、所属している地域構想学科の学びに役立てるためです。より直接的に地域や住民の方々とコミュニケーションが取れると思い、ボランティア活動を始めました。

佐々木 本学の授業の中で、さまざまな地域課題を知り、実際の現場はどうなっているのか、どう向き合えば解決できるのか、ボランティア活動なら、そういった課題に向き合えるのではと考えてボラステに入りました。

吉村 元々、少年法などに興味があって宮城県警のボランティア活動に携わっていたのですが、ボラステでは自分たちの手でボランティアを企画できるということを知り、面白そうだなと思って参加しました。

渡辺 私はみんなみたいに、カッコいいこと言えなくて。私自身、特別な資格などを持っていない中で、少しでも就職活動に有利になればという思いでボラステに入ったというのが本音です。

—— ボランティア活動のきっかけは、人それぞれですね。ただ例えば渡辺さんは、当初はボランティアにそれほど思い入れはなかったようですが、今回、能登に向かう決断をしました。そこにはどんな思いがあったのでしょうか。

渡辺 日頃、災害に関する授業を受けているのですが、能登の状況が地震発生から半年経っても大きく変わっていないということを知り「本当か?」と思っていました。その際にちょうど能登での災害ボランティアを募集するメールが届き、実際に自分の目で現地を確かめてみたいと思って参加しました。

鈴木 私はメールが届いた時点ですぐに「行きたい!」と即決しました。元々、地震が起きた1月の段階から「いつ行けますか」とみんなと先生たちに聞いていたんです。

白田 そうだったよね。みんなで「早く行きたいね」と話していて。ただ、まだ調整に時間がかかると聞かされたので、「今の自分たちにやれることはないか」と山本さんと話し合って、募金活動を始めました。

山本 雪が降っている中、募金活動をしたこともありましたが、たくさんの方が親切な言葉をかけてくださり、募金に応じていただきました。きっと同じように大変な経験をした宮城の人たちだからこそ、他の人たちを助けたいと思うんだろうなと感じました。

白田 そんな活動をしていたので、私も山本さんも能登での災害ボランティア募集のメールが届いたときには「ようやく行けるね!」と話していました。

被災地に向き合い、自分の想いと向き合う。

—— 実際に現地へ行ってみて、率直にどう感じましたか？

白田 輪島市に向かう前に金沢に立ち寄ったのですが、地震のことを感じさせないごく普通の光景が広がっていて。「あれ?想像より復旧が進んでいるのかな」と思いました。でも、車で徐々に現地に近づくにつれ、ブルーシートをかけた屋根が多くなったり、道が隆起していたり、やっぱり大変な災害だったんだと気付かされました。

佐々木 車窓から見た光景は、私もすごく覚えていて。元々、道路が少なかったり、崖崩れになっていたり、交通の便の悪さも復興の遅れの原因なのではと感じました。

渡辺 実際に被災地を訪れると、やはりテレビやSNSで見るとよりも大変な状況だということが強く感じられて、「まだまだボランティアの力が必要だ」と思いました。



地域総合学部 政策デザイン学科 2年
渡辺 慶さん



法学部 法律学科 3年
吉村 明莉さん



経済学部 経済学科 2年
佐々木 翔大さん



- | | | |
|--|------------------------------------|------------------------------|
| 1 | 2 | 3 |
| 1.門前東小学校で校舎内外の清掃活動を実施。校舎は避難場所として利用されていた。 | 2.深見漁港付近の海岸清掃。漁業などの支障となる流木などを撤去した。 | 3.輪島市内の被災寺社及び被災住居からの家財移動の様子。 |

—— 現地の活動の中で、どんなことが印象に残っていますか？

山本 小学校の清掃活動に行ったのですが、教員の方が「ありがとう」と明るく声をかけてくれて、お寺の片付け作業でも温かく迎え入れてもらったのが印象に残っています。ただ表に出さなくても、心は傷ついているかもしれないので、その中でどうやり取りをすればいいのか模索しながら活動したことを覚えています。

吉村 どう接すればいいのかというところは、私も今後の課題だと感じています。被災された方の中には、精神的に地震から前に進めていないような方も当然多くいて、話し相手にでもなれて「一瞬でも気が休まれば」と思いましたが、そんな存在にもなれなくて。「もっと頼ってほしい」というもどかしさとともに、「私に何ができるんだろう」と今でも考え続けています。

白田 こちらが「少しでも力になりたい!」という気持ちでいても、人の役に立つことって難しいなと思いました。色々な手伝いをして、少しは力になれたかなと思ってても一部しか変わっていない現状を見ると、やはり復興というのは大変で時間がかかることなんだと現地で感じました。

渡辺 私は身体的な面でも災害ボランティアの難しさを感じました。1日4時間ほどの活動で「もっとやりたいな」と思いつつ、炎天下で

ついて考えたりしましたか？

鈴木 私は栗原市出身で、震災で唯一、震度7を観測した地域です。その後の復興状況を見てもハード面の復旧は時間とともに進みますが、心の痛みは残り続けていると感じています。いずれ能登でもそういった痛みを解消するのではなく、どう伝えていくかが重要になってくるんじゃないかと考えていて、私も少しでも貢献していけたらと考えています。

吉村 震災の時は、小学1年生でしたが両親がなかなか帰って来なくて不安だったのを覚えています。また、当時はわかりませんでした。私たちの地域の復興にも多くの人たちのサポートがあったんだと能登での活動から実感することができましたし、そういった支え合いの大切さも強く感じられました。

佐々木 私の出身地の釜石市は津波で大きな被害を受けました。幼児ながらに町が津波にのみこまれる光景を高台から見たことを覚えています。それもあって、輪島の人たちに共感できる部分も多くあるかと思ったのですが、実際に行ってみると本当に自分が寄り添えているのかと葛藤しました。

白田 私は山形出身で、震災で大きな被害を受けたわけではありませんが、その年代に生きているのである程度は被災された方の気持ちがわかるかなと思っていました。ただ、実際に能登に行ってみると、理解したり、共感したりすることの難しさを感じて。その中でどう災害ボランティアとして関わっていけばいいのか“正解”があるわけではないと思いますが、その答えを今後も考えていきたいと思っています。

—— 今回の活動のさまざまな経験を通じて、それぞれに新たな思いや考えが芽生えたようですが、最後にこの教訓を今後どう活かしていきたいか聞かせてください。

被災地にある本学だからこそできる取り組みを。

地域総合学部 政策デザイン学科

定池 祐季 准教授

中学生の頃に奥尻島で北海道南西沖地震を経験したことをきっかけに、災害研究の道へ進みました。2018年の北海道胆振東部地震では、大きな被害を受けた厚真町役場の災害対応支援に携わり、現在も被災者支援や地域防災などに関わり続けています。今回の活動にあたっては、事前研修の中で(自ら撮影した写真を使い、)能登半島の状況について情報提供を行いました。活動報告会では、学生達が被災地の様子や住民とのやり取りなどから様々なことを感じてきたことがうかがえました。本学の一員として、各地の復興や防災・減災に関わることの意義を日々感じています。日頃の講義では被災した学生の心情に配慮しながら、様々な災害の歴史や復興への歩み、防災教育や災害伝承などについて扱っています。来年度開講するゼミでは、被災地を訪問し、学びを深める予定です。厚真町では、石巻の「ど根性ひまわり」の子孫が夏の景色を彩っています。学生達には災害後に始まった住民活動に関わりながら、そんな“被災地のバトン”も見てもらいたいと考えています。

鈴木 今回の経験や防災対策について伝えていくのが、私たちの使命だと思っています。まずは身内や友人から。伝え方は色々あると思いますが、ちゃんと自分の言葉で伝えていきたいですね。

渡辺 能登に行ける機会があれば、また行きたいです。今回、友人たちには何も言わないで行ったのですが、帰ってきたら「なんで先に行くんだよ」と言われて。結構、ボランティアに興味がある学生は多いんじゃないかと思いました。

山本 確かに今回は夏休みだったこともあって、帰省のタイミングなどで行けないという人が周りでも多かったかもしれないね。

白田 よく「行ってみて、どうだった?」とか聞かれたり、「次あったら行く!」と声をかけられたりしたね。私は今後、鈴木さんや渡辺さんが話したように、現地に行かないとわからないことを伝えていきたいです。私たちが見たもの、感じたことを伝えることで、自分事として防災のことを捉えてくれる人が増えるんじゃないかと期待しています。

山本 能登の復興が遅れている状況なので、これからも継続して募金活動をしたり、現地に行ける機会があれば、また災害ボランティア活動をしたいと思っています。

吉村 私も継続して募金活動などやっていくことで、遠くからでも輪島を応援していることが伝えられればいいです。その行動自体が防災の呼びかけにもなると思うので、そういった活動を発信していきたいです。

佐々木 防災の知識を知っているのと知らないのでは、生死に関わる違いがあります。このせんだい3.11メモリアル交流館や伝承館などの存在を広く伝えたり、日頃から備蓄や避難場所の確認をしたりすることの重要性を伝えて、周りの人たちの防災意識を高めていきたいです。

—— みなさん、本日はありがとうございました。



後援会総会・大学開放プログラム

2024年5月25日(土)

五橋キャンパスと土樋キャンパスの2キャンパスを会場に、
「2024年度東北学院大学後援会総会」と「大学開放プログラム」を開催しました。



五橋キャンパスの押川記念ホールで行われた後援会総会では、氏家照彦後援会会長が議長を務め、2023年度の後援会収支決算及び会計監査報告、2024年度後援会予算案や事業計画などを説明し、お集まりいただいた多数の保護者にご承認いただきました。大学開放プログラムでは、フジテレビ系「ホンマでっか!? TV」でもお馴染みの、早稲田大学名誉教授 池田清彦さんのセミナーやパイプオルガンコンサート、キャンパス見学ツアーなど、大いに盛り上がりしました。

後援会総会

(1) 2023年度後援会庶務報告

白木進庶務担当理事より、役員人事、2023年度役員会、2023年度後援会総会、2023年度地区後援会の開催について報告があり、原案通り承認されました。

(2) 2023年度後援会収支決算報告並びに会計監査報告

浅野ひとみ会計担当理事より報告があり、原案通り承認されました。長谷昌武監事より、帳簿等が正確に整備されていることについて監査報告がなされました。

(3) 東北学院大学後援会会長の選任

白木進庶務担当理事から推挙された、氏家照彦氏の再任が承認されました。

(4) 2024年度後援会事業計画(案)

白木進庶務担当理事より、2024年度後援会総会、地区後援会について説明があり、原案通り承認されました。

(5) 2024年度後援会収支予算(案)

浅野ひとみ会計担当理事より説明があり、原案通り承認されました。

(6) 東北学院大学後援会規約の改正

(7) その他



保護者と学生のための 教養セミナー

池田清彦氏による「がんばらない生き方」をテーマとしたセミナーを開催しました。ご自身の体験を交えながら、今後の人生のヒントになるようなお話をいただきました。

キャンパス見学ツアー



特別礼拝・ パイプオルガンコンサート



他にも、
様々な催しがありました！

学科別懇談会



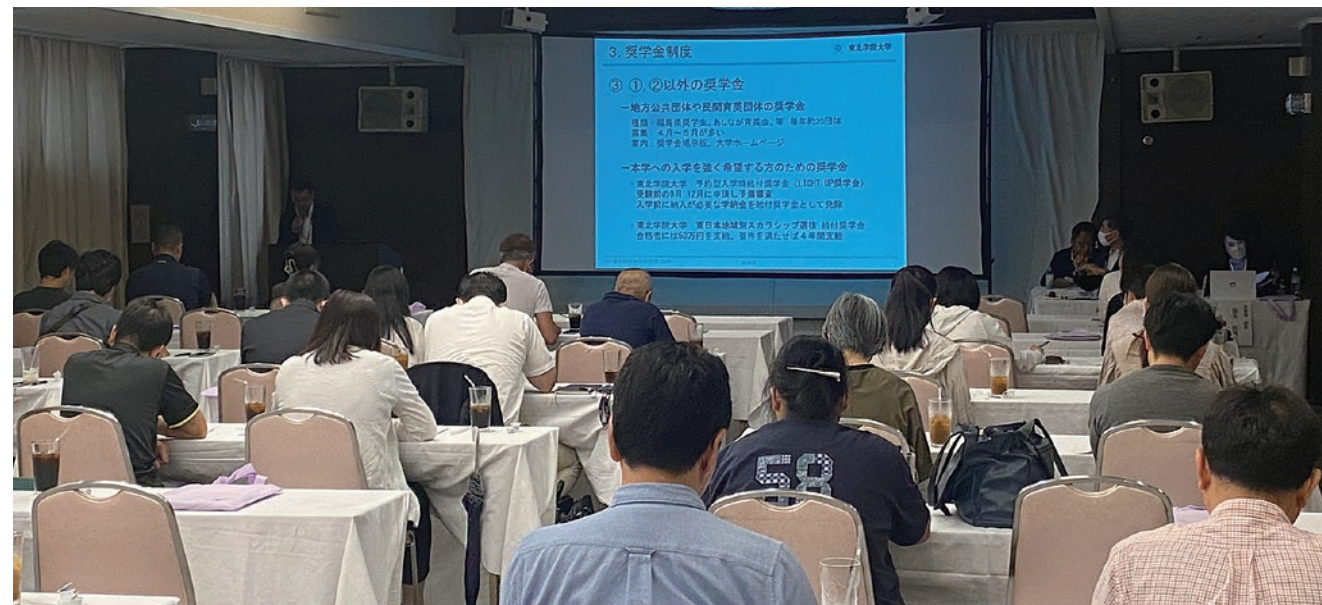
学生の就職を考える セミナー



東北学院大学地区後援会

2024年7月6日(土)～9月8日(日)

全国26地区で地区後援会を開催し、本学教職員による東北学院大学の近況報告や個別面談、
自治体等による地元就職セミナーなどが行われました。



主なプログラム

●大学からの挨拶

本学の教育方針・近況の報告など

●3部からの説明

・学務部…「進級・卒業」「単位取得」「科目登録」など
・学生部…「奨学金」「課外活動」「アルバイト」など
・就職キャリア支援部…「就職活動」「キャリア形成」など

●自治体等による地元就職セミナー

●卒業生紹介動画上映

●個別面談(希望者のみ)

さまざまな内容に対する相談を個別に行いました。

3部からの説明

お子様の学業や学生生活、就職活動等について不安を抱いている保護者の方は多くいらっしゃると思います。地区後援会では、学務部、学生部、就職キャリア支援部の職員が活動内容を紹介し、ご家庭で活用いただきたい情報などをお伝えしました。

学務部

学びの成果や現状を保護者の皆さまと共有し、
東北学院大学での4年間をより豊かなものに。

学務部からは、本学が導入している各種学修支援システムや、履修成績通知書(成績表)の見方、GPA(Grade Point Average)制度に関するご説明をいたしました。
お子様の時間割や成績表は、Web閲覧サービスから確認することができますので、「必要単位」と「修得単位」の比較、「／／／(履修放棄)」の確認等を通じて、是非、お子様と学業面での成果を共有いただきたいと思います。

詳しくはWeb閲覧サービス
(在学生の保護者様限定)



学生部

安全・安心な学生生活のため、奨学金や課外活動など、多岐にわたる相談・サポート。

奨学金については、日本学生支援機構による貸与・給付奨学金のほか、本学独自の給付奨学金を設け、経済面での支援を実施しています。学生総合保健支援センターでは、障がいのある学生の支援のほか、人間関係や勉強上の悩みなどに向き合う学生相談室を設け、ご家族からの相談にも応じています。また、様々なハラスメント問題に対応するため、専用の相談電話やメールアドレスも用意しています。

就職キャリア支援部

学年ごとに就職支援を実施。就職活動の主役は学生本人。保護者は「サポーター」。

2023年度本学卒業生の就職率は95.9%で、コロナ禍以降上昇傾向にあります。早期に内定を得ている学生を見ていると、受ける企業を厳選し過ぎず、活動量を増やすことが内定獲得のカギと言えそうです。保護者の価値観や言葉は、学生たちの意思決定に大きな影響を及ぼします。「無関心」でも「過保護」でもなく、「サポーター」として学生本人を支えていただくようお願いいたします。



OB訪問

Shinji Ota

太田 伸志さん

株式会社スティーブアスタリスク:代表取締役社長

2000年3月、経済学部経済学科卒業。2002年に上京。2018年、クリエイティブカンパニー Steve* inc.を設立。クリエイティブディレクターとして、サントリー、楽天、サッポロビールなど、企業のブランディング企画を多数手がける。また、本学の非常勤講師を務めるなど、大学や研究機関との連携にも注力。仙台市庁舎建て替えにともなう官民連携検討委員の1人に選出されるなど、地域課題を解決するための活動にも力を入れている。2022年、出身地である宮城県丸森町へ移住。東北初の拠点として山形市にSteve* CREATIVE LOUNGEを設立した

大切にしている
想いや体験が
今につながり、
未来をつくる。

クリエイティブな発想や表現で、
東北の魅力を多くの人たちへ。

「一見、関係のないものをつなぎ合わせて、新しい価値や魅力をつくるのが好きなんです」と話すのは、株式会社スティーブアスタリスクの代表取締役社長・太田伸志さん。同社は多彩な企業のブランディング・商品開発をはじめ、地方自治体の課題解決などにも取り組んでいる。

クリエイティブディレクターや作家などの顔を持つ太田さんが、クリエイターの道へ進むことになったきっかけの一つが、本学のゼミでインターネットに出会ったこと。「これが普及すれば世界がガラッと変わる」と衝撃を覚えました。

卒業後は仙台でSEとして勤務した後、デザインの仕事を志して上京。「好きな映画の主人公がSEだったんですが、その映画の配給会社にwebデザイナーとして就めることになりました」。その後、制作会社を経て、2018年に現在の会社を創業。2020年までは本学の非常勤

講師も務めた。「学生たちには『自身の個性や価値観を大切にしてほしい。それが将来、何らかのかたちで生きるはず』と伝えていました」。

さまざまな想いや体験が、現在の活躍につながっている太田さんのキャリア。2022年には、その原点である故郷・丸森町へ移住し、町の公式クリエイティブディレクターに就任した。「今後も行政や企業、大学などと連携して、丸森をはじめ、仙台や山形など東北の魅力をより広く深く発信していきたいですね」。

株式会社スティーブアスタリスク

- 設立:2018年
- 代表取締役社長:太田伸志
- 所在地(本社):東京都中央区銀座7丁目3-6
銀座高木ビル 8F



東京・銀座のTOKYO OFFICEと、山形市のCREATIVE LOUNGEを拠点に、企業や商品、地域などのブランディング及び企画デザインなどを得意とするクリエイティブカンパニー。プロジェクト立ち上げのワークショップなどコンサルティングから関与することも多く、長期的な企業成長を共に考えるパートナーとして多くの実績を誇る。

OG訪問

Mao Natori

名取 茉央さん

株式会社 Grune:Webデザイナー・ディレクター

2020年3月、経営学部経営学科卒業。在学中から所属サークルで商業施設とのコラボレーション企画に携わったり、荒町商店街の地域マップを作成したりと、さまざまな活動を経験。卒業後はPR会社に就職し、提案営業として勤務。その後、株式会社Gruneに入社し、Webデザイナー・ディレクターとして活動。また、シーグラスアートのワークショップや得意のイラストを活かした似顔絵イベントなど、仕事以外でも精力的に活動している。

本当に求められている
ものは何か、
相手の意思に寄り添う
ディレクターに。

学生時代の経験を武器に、
顧客のビジネスを成功へ導く。

昨今、急速にニーズが高まっているDXの推進サポートなど、多彩なITサービスを国内外で手掛けている株式会社Grune。同社のWebデザイナー・ディレクターとして、東北にある企業のWebサイトの制作などを行っているのが本学の卒業生・名取茉央さんだ。「WebデザイナーとしてデザインやUIを作ったり、ディレクターとして競合の分析から施策の立案、Webライティングなど幅広い業務を担当しています」。

学生時代から地域商業に興味があったという名取さんは、本学在学中、企業と学生がコラボレーションして企画などを実施するサークル「もりまちCoAL」で活動していた。「特に印象に残っているのは、仙台ロフトとコラボして福箱を企画したこと。マーケティングから商品開発、PRや販売まで貴重な経験を積むことができました」。また、ゼミの先生から紹介された荒町商店街の地域マップづく

りの経験は、現在の仕事に大いに役立っているという。「店舗の方にお話を聞き、相手が本当に求めているものは何なのか、背景までくみ取ることの大切さを感じました」。

今後は海外のプロジェクトにもより積極的に関わりたいと話す。「海外拠点のメンバーにしっかり要望などを伝えられるように、ネイティブの同僚とのランチ勉強会や、通勤時間を利用して英語の勉強に励んでいます」。

株式会社 Grune

- 設立:2016年
- 代表取締役:山下敏義
- 所在地(仙台オフィス):宮城県仙台市青葉区本町1-6-23
インテリックス仙台ビル 8F



DX戦略の立案からオフショア開発(Web、アプリ、XR、AI開発)までワンストップで提供するコンサル+エンジニア集団。高いスキルを持ち、品質に徹底的にこだわるエンジニアによるITコンサルティングで、企業や組織が抱える課題を解決。仙台・東京・インドネシアに拠点を置き、国際チームによる海外プロジェクトも数多く手掛ける。

Laboratory tour

ゼミ研究室 探訪



三戸部 佑太 准教授

東北大学大学院工学研究科助教、2017年より東北学院大学工学部環境建設工学科講師、2019年同准教授。各種学術講演会で表彰を受ける他、論文誌への寄稿等、研究者としても幅広く活躍している。

波や土砂の 複雑な動きを捉え、 防災や減災に貢献する。

三戸部 佑太ゼミ

工学部 環境建設工学科

研究キーワード

水理実験

画像計測

3次元写真測量

UAV

数値シミュレーション など



定量化が難しかった

波浪変形を3次元で捉える

水の流れは非常に大きな力を持っており、波浪や津波は時に大きな災害を引き起こします。しかし、波が砕ける“砕波”際の動き(波浪変形)や土砂の動き(土砂輸送)は非常に複雑で、これらを3次元的に捉える観測手法はまだ確立されていません。私は、こうした波浪変形や土砂輸送を可視化し、定量化する計測法の開発に取り組んでいます。データ解析によって現象を解明することで、数値シミュレーションの高度化や、それによる海岸管理および防災・減災対策に貢献したいと考えています。

研究では海岸で2台のドローンを飛ばし、空撮した波の動画像から平面的な波の伝

播を捉えるだけでなく、視点画像を合成して、砕波の3次元的な形状を捉える手法に挑戦しています。また、本学の五橋キャンパスの地下には波を生み出す実験水路が備えられています。この設備を活用し、ディープラーニングの技術を取り入れながら、照明や撮影方法を工夫して計測用の画像を撮影。砕波検出や波の高さの測定、水中に巻き上げられた浮遊砂濃度の3次元的分布などの分析を行っています。

子どもでも防災に触れられる

ゲームを開発

近年、力を入れていることの一つが、防災まちづくりに関するゲームを開発することです。本学の機械工学専攻バーチャルリ

アリティ研究室と連携して、津波数値シミュレーションと画像解析技術を応用したゲームを開発しており、気軽に楽しみながら学べるゲームで子どもから大人まで多くの人に水害の危険性を伝え、防災意識を向上するきっかけにしたいと考えています。

「サイエンス・デイ オブ ザ イヤー 2019(仙台市長賞)」を受賞した津波防災まちづくりゲームは、津波からまちを守ることがゴールです。仮想的なまちに堤防や防災林、建物、道路などに見立てたブロックを自由に配置し、津波の浸水を防ぎながら住民を無事に避難させることを目指します。これによって、どのように津波がまちに浸水するか視覚化しながら、想像しにくい危険について体感できるような仕掛けにしています。

また、避難者視点で津波からの避難を目指すゲームでは、まず初めに何の情報もないまま避難してもらいます。その後、仮想的なまちのマップを見せられ、避難経路を確認してから再びゲームに挑戦してもらいます。そうすると大半のプレイヤーは1回目の時よりも、スムーズに避難することができます。これによって、知識の有無による避難のしやすさの変化を体感してもらい、あらかじめ津波や震災に備えておくことの大切さについて理解してもらうことが狙いです。

こういった“大事なことではあるものの、見えないもの”を見える化することが、研究のモチベーションです。これからも研究を通して、防災・減災や科学への啓発に取り組んでまいります。

ゼミ生に
感想を聞きました



環境建設工学科4年

小松 翼さん

私の出身地は大船渡で、東日本大震災で甚大な被害を受けた地域です。そのため災害や防災について、さまざまな想いを抱いています。そんな中、講義で津波の避難シミュレーションゲームのことを知り、防災について知見を深められると思い、このゼミに入りました。ゼミでは防災ゲームの担当として、企画や開発を行い、イベントでは子どもたちにゲームをプレイしてもらいました。震災のことを知らない子どもも多いですが、「パパとママに今日のことを伝えよう」としてくれることもあり、防災啓発に貢献できたことを実感しました。卒業後は海洋土木の仕事に就きます。このゼミでの学びを活かし、災害に強い護岸などを造ることが目標です。

東北の地域経済発展を担う データサイエンス人材育成事業

データは「21世紀の石油」と呼ばれるように、現代社会の発展にとって重要なもの。

しかし、データはそのままではただの数字の羅列であり、それ自体が何かを生み出すことはありません。

東北学院大学が取り組んでいる「東北の地域経済発展を担うデータサイエンス人材育成事業」では、

データを読み取り、活用する能力を持つ経済データサイエンス人材を地域に輩出し、東北の発展へ貢献することを目指します。



大学院人間情報学研究科
若林 裕之 教授



経済学部 経済学科
大学院経済学研究科
倉田 洋 教授



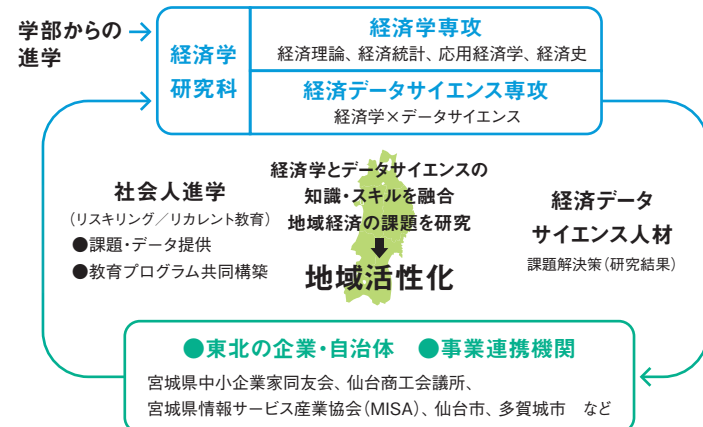
経済学部 経済学科
大学院経済学研究科
アレイ ウィルソン 教授

東北の活性化に貢献する、経済データサイエンス人材を。

東北学院大学は、文部科学省の「デジタルと掛けるダブルメジャー大学院教育構築事業～Xプログラム～」の令和4年度公募において、全国から選定された6校の中の1校となりました。2025年4月には大学院経済学研究科にデータサイエンス系科目を組み込んだ「経済データサイエンス専攻」を新設。経済学の知識に加えて、数理・データサイエンス・AIの専門知識とスキルを修得した修了生を輩出し、東北の持続可能な活性化に貢献していきます。

- 経済学研究科に経済データサイエンス専攻を設置（2025年4月開設予定）
- 連携事業者との教育プログラム共同構築
- 大学から進学する学生に加え、連携事業者から派遣された社員・職員の参加
- 就職プログラムの連携
- 各種講演会、セミナー等の開催、修了生の地域経済への受け入れ土壌形成

東北の地域経済発展を担うデータサイエンス人材育成事業



Interview

「東北の地域経済発展を担うデータサイエンス人材育成事業」について、大学院ダブルメジャー制度実施委員会委員長の倉田洋先生、新設される大学院経済学研究科「経済データサイエンス専攻」担当教員のアレイ ウィルソン先生と若林裕之先生にお話を伺いました。

東北初となる

経済データサイエンス人材を
育成する大学院

東北学院大学は、教育プログラム「東北の地域経済発展を担うデータサイエンス人材育成事業」が2022年に文部科学省「デジタルと掛けるダブルメジャー大学院教育構築事業～Xプログラム」に採択されて以来、大学院経済学研究科への新専攻設置の準備を進めてきました。2024年6月、文部科学省に申請していた大学院新専攻の設置届出書が受理され、2025年4月に大学院経済学研究科経済データサイエンス専攻の開設が決定しました。

大学院ダブルメジャー制度実施委員長の倉田先生は、新設される経済データサイエンス専攻について、「通常、経済学研究科は経済学だけを専門的に学ぶけれども、経済データサイエンス専攻ではXプログラムに採択されていることにより、経済学とデータサイエンスの2分野について専門的に学ぶことができます。座学だけでなく、2分野それぞれに対して本事業の連携事業者である企業や自治体の実データを用いて演習を行い、2年次に行う「特定テーマ研究」では、自身で研究テーマを選び、経済学・データサイエンスを用いて、どのように解決に導けるか、1年間かけて取り組んでいきます。このような経済データサイエンス人材を育成するコンセプトの大学院は、東北では初めての設置となります」と述べてました。

東北学院大学が、この教育プログラムを推し進める背景にあるのが、東北におけるDX化の現状です。現在、政府が掲げるデジタル革新戦略Society5.0を念頭にしたDX化が進む中、東北経済のDX化は遅れており、データサイエンス人材も不足しています。アレイ先生は「データサイエンス人材の需要が高まっている一方、その分野について学んだ学生は関東のIT企業などに就職することも多く、東北で活躍する専門知識

とスキルを備えた人材が求められています」と話し、若林先生は「農家の高齢化や自治体の人口減少、震災からの復興など、社会課題が多い東北ではデータサイエンスを活用できる場面が数多くあり、大きな可能性を持っています」と語りました。



2分野の学びを地域に還元する
東北学院大学の挑戦

経済データサイエンス専攻の学修プログラムにおける特徴の一つが、東北の企業や自治体、事業者団体などと密に連携しながら学べる点だと倉田先生は話します。「企業や自治体といった連携事業者の実際の課題やデータについて、専攻で身につけた知識・技術を活かしながら課題解決策を考え、それを連携事業者に提案し、フィードバックをいただきます。このサイクルを循環させることで東北の活性化につなげつつ、学生は経済学とデータサイエンスの力を直に感じながら、社会でその力を活かす意識が根付いていきます」(15ページの図参照)。

実際に新しい専攻では、宮城県内の自治体の将来の人口推移や年齢分布を予測し、財務計画に役立てるなどの取り組みも行われる予定です。倉田先生は「こうした取り組みを繰り返すことで、この専攻で学ぶ社会人の方には習得した技術やスキルを会社や組織にフィードバックすることを期待しています。また、学生の場合はIT企業に関わらず、さまざまな業種の企業や自治体などで活躍し、東北の経済の発展に寄与することを願っています」と語りました。

また、経済データサイエンス専攻では、募集人数を抑えることで経済とデータサイエンスの先生2人につき1人の学生をフォローする体制となっており、丁寧な指導のもと学びを深めることができます。若林先生は「文系の学部学科を卒業した学生には、コンピュータの用法やデータ解析法などのデータサイエンスの基本からしっかりと指導していきます」と言い、アレイ先生は「わからないことがあれば私たちがサポートしますので、経済学、データサイエンスに興味があれば、どんな人でも失敗を恐れずに挑戦してほしいですね。そこから東北の発展につながるヒントが見出せるかもしれません」と期待を寄せています。

経済学とデータサイエンスを融合させた学びで経済データサイエンス人材を輩出し、東北の持続可能な経済発展につなげるという新たな挑戦。最後に倉田先生は「この専攻での学びを東北に還元するというのが、東北学院大学の責務だと思います。ぜひ、みなさまにも注目していただければうれしいです」と話しました。



大学院経済学研究科
Webサイト



東北の地域経済発展を担う
データサイエンス人材育成事業
Webサイト

各部からのお知らせ

国際交流部より

CONVO LOUNGE

国際交流部では、「外国語を学んでいてもなかなか会話のチャンスがない」という学生のために、毎月ネイティブスピーカーとの会話を楽しむCONVO LOUNGE(コンボ・ラウンジ)」を開催しています。語学を教えた経験のある学外講師が、英語、中国語および韓国語それぞれのラウンジを担当します。

海外からゲストを迎えてのスペシャル回など、より賑やかなイベントも実施しており、5月にはアメリカ・ミネソタ州クラウン大学の学生7名を交えてのグループトークを楽しみました。また、10月にはTGCF English Caféとの共催による「Hawaiian Party」を実施し、ハワイの宣教師チームからハワイの食文化などを紹介していただきました。

CONVO LOUNGEは、語学力に自信がない方も参加可能です。多くの皆さんの参加をお待ちしています。

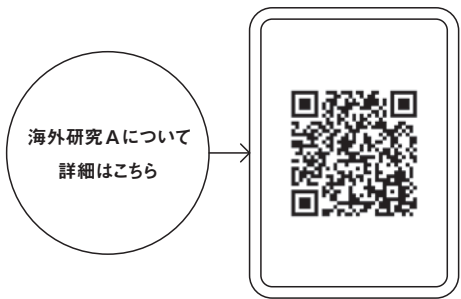


「海外研究A」の2025年度開講

コロナ禍以降未開講となっていた「海外研究A」(通年/4単位)を2025年度より再開します。この科目は、東北学院の校祖であるW.E. ホーイ、D.B. シュネーダーに縁のある土地を訪ねて東北学院の建学の精神に触れるとともに、海外の様々な実情を見聞し、総合的な海外研究を行うことを目的とした、本学のオリジナルプログラムです。

渡航前は英会話および演習を受講し、夏休みの留学に備えます。2025年度の留学では、協定校レニソンユニバーシティカレッジ(カナダ・オンタリオ州ウォータールー)に滞在し、レニソン大学教員によるレクチャーを受講します。また、グループに分かれてのニューヨーク見学旅行も経験しますが、出発から帰国まで本学の教職員2名が同行し、学生の皆さんの留学生生活をサポートします。

参加募集は2025年1月を予定していますので、詳細は大学HPでご確認ください(プログラム内容は変更となる場合があります)。



就職キャリア支援部より

就職キャリア支援部では、学生の就職活動に向けた良い準備のために、学年に応じ段階を追って各種イベント等を実施し、様々なキャリア支援を提供しています。

2024年6月15日(土)に、「TGインターンシップ&業界研究フェア」を土樋キャンパスの教室と体育館を使用して、対面で開催しました。企業担当者からインターンシップをはじめとする就活イベントに関する情報を、本学学生に提供するセミナーとして、企業50社がブースを出展し、3年生を中心として約1,000名の学生が参加しました。近年、インターンシップを実施する企業が増加しており、学生にとっても業界、企業を直接知ることのできる最初の機会となり、夏休みから、多くの3年生がインターンシップへ参加しています。今回のインターンシップに向けてのイベントには、3年生だけでなく2年生の参加もあり、多くの学生が高い意識を持って参加していました。

2025年1月下旬から2月上旬にかけては、「東北学院大学仕事研究セミナー」を延べ5日間にわたって開催する予定です。2026年3月及び2027年3月卒業・修了予定者を対象として、各企業の担当者から業界や仕事理解を深めるお話をいただくセミナーです。オンライン開催となるため、学生にとっても多くの企業から業界の話を聞く機会となり、3年生にとっては本格的な就職活動開始直前の情報収集の場となります。

他にも、最近の就職環境をご理解いただくための「保護者のための就職懇談会(2・3年生保護者対象)」、「4年生の内定者による就職体験談発表」、低学年向けに各自治体主催の「地域の企業を知るためのセミナー」の開催、各講座等を実施しております。

是非、保護者の皆様からお子様が進路を迷わず、良い準備ができるよう、各行事への参加をお伝えください。

学生部より

課外活動団体(体育会)が活躍しています

本学体育会の各団体及び個人の多くが全国大会へ出場しています。2024年9月30日現在、16の団体(男女別にカウント)、84名の個人にのぼります。その中で、弓道部(女子団体)が第72回全日本学生弓道選手権大会(インカレ)女子団体戦で初優勝を果たしました。

本学学生部は今年度から課外活動の強化を目指して、東北予選等を経て全国大会に出場する団体の現地応援、飲料等の提供を開始しました。また、後援会の援助により土樋、五橋キャンパスで横断幕を設置し、大会出場を盛り上げております。

課外活動の様子は、課外活動応援サイト「TG MIND」(<https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/tgmind/>)でご覧いただくことができます。

体育会や文化団体などへ入部を希望される場合には、学生課窓口までご相談ください。



(弓道部)

後援会からのお知らせ

東北学院大学後援会資格取得報奨制度について

資格取得の奨励と学生の資質向上を目的として、後援会費を納入いただいている在学生(学部生・研究科生)を対象に、国家資格取得者やTOEIC、TOEFLIBTなどの基準点取得者へ資格取得報奨金を給付いたします。

総合定期戦で本学が勝利しました

第75回対青山学院大学総合定期戦が青山学院大学を主管校に、第70回対北海学園大学総合定期戦が本学を主管校に開催されました。対青山学院大学戦は6月1日から2日までの期間、コロナ禍前の定期戦と同様に盛大に競技が繰り広げられ、本学が2016年度以来の総合優勝を果たしました。対北海学園大学戦は6月21日から23日までの期間、仙台を会場に、初日の仙台市中心部の両校パレードに始まり、各競技とも熱戦が繰り広げられ、本学の70回目の勝利で終えることができました。

各団体ともスポーツ技術の向上はもちろん、学生同士の親睦を深める大変有意義な時となりました。

各種マナーについてのお願い

2023年4月に泉キャンパスと多賀城キャンパスを集約して五橋キャンパスが開学し、土樋・五橋地区に大きな学生生活圏が誕生しました。活気にあふれる街並みの一方で、交通ルール、喫煙マナー、騒音、私有地立ち入り、ごみ投棄などの苦情が多く寄せられております。ご家庭におきましても、お子様との会話の中で取り上げていただければ幸いです。

